

スポーツジャーナリスト
増田明美ますだあけみ

肌で感じたことを 話すだけ

昨年、NHKの朝の連続テレビ小説「ひよっこ」の語りを担当させていただいた。気合い十分で、とびつきの声でマイクに向かうと、「増田さん、いつも通りをお願いしますよ。どうでもいい小ネタを言う、マラソン中継のようにね」と監督。それから、みね子（主人公）の人生を自然体で伴走した。人生は出会いといわれるが、永六輔さんとお会いできたことは神様からの贈り物。選手生活を終え、間もなくしてラジオのパーソナリティの仕事をいただいた。生放送と聞き、母は猛反対。「明美にあるのは基礎体力だけ。基礎知識をつけてからがいい」と。でも、無口な選手と思われていた私がよくしゃべる、この意外性がウケるのは今しかない。案の定、二回目の放送で結納をケツノウと読み、しばらくして門松をモンマツと読んだ。「大変だあ、お母ちゃん、寝込んでしまったよ」と父から電話があった。

そんな私を、永六輔さんはおもしろいと思ったのか、かわいそうだと思ったのか、番組に招いてくださった。そのとき、私は「どうしたら永さんのように『匂いが伝わる』話し方が出来るのですか？」と素直な気持ちをぶつけた。すると永さん、「僕は会いたい人がいたら、自然と足が向かいます。会って肌で感じたことを話しているだけ」とおっしゃった。それを機に、よく一緒に歩かせていただいた。歩きながら、日本の文化や古典芸能のお話もたくさん。秋、街路樹が色づき、木からホロリホロリと落ちる葉っぱを眺めながら、「自然で美しいですね。人間だって老いていく姿は自然。ボクはそういうふうに老いたいです」とおっしゃった。それから二十年后、永さんはパーキンソン病を患った。話術、話芸に優れた永さんが、思うようにしゃべれない葛藤は大変なものだったと思う。それでもラジオに向かい続けて、病気の自分、老いた自分を隠すことがなかった。そんな永さんは、二〇一六年七夕の日に旅立たれた。自然に生きる美しさを教えていただき、そこから生まれる言葉の大切さを学んだ。私もそんな生き方をしたいと思う。



1964年千葉県生まれ。高校時代に長距離種目で日本記録を多数樹立。1982年、マラソンで日本最高記録をつくり、1984年ロサンゼルスオリンピックに出場。1992年に引退するまでの13年間に残した記録は、日本最高記録12回、世界最高記録2回更新。現在は、スポーツジャーナリスト、大阪芸術大学教授。執筆活動やマラソンの中継解説のほか多方面で活躍。